

## アンケート調査によるコロナ禍における在宅勤務・受講時の住宅の使われ方と課題に関する研究

A Study on the Usage and Problems of Housing in Working and Taking Classes at Home Online under the COVID-19 Pandemic by Questionnaire Survey in 2020

○太田 匡哉\*、小松 尚\*\*  
OHTA Masaya, KOMATSU Hisashi

This study examined Japanese housing issues that arose when residents worked and took classes at home online under the COVID-19 pandemic through a questionnaire survey conducted in October 2020. The survey was conducted by snowball sampling method via SNS for two weeks. The analysis of 335 responses revealed problems in the following areas: the availability and organization of places for working and taking classes at home, managing relationships with respondents' families and housemates, relaxing while working and learning online, and sharing public rooms such as living and dining rooms.

キーワード：住宅、オンライン、在宅勤務、コロナ禍、公室、私室

Key words : Housing, Online, Work at Home, COVID-19 Pandemic, Public Room, Private Room

### 1. 研究の目的と方法

#### 1-1. 研究の目的

2020年に発生した新型コロナウイルスの世界的感染拡大の中でオンラインツールを利用した活動が日常化し、住宅の使われ方は大きく変化した。コロナ以前には住宅の外で行っていた仕事や学習をコロナ禍では住宅内で行うようになり、それまで想定されていなかった在宅での勤務や受講（以下、在宅勤務・受講）や、それに関係する生活行動のための対応が多くの家庭や住宅で急遽求められた。その際、情報機器や高速インターネット回線などの情報環境の整備以上に、在宅勤務・受講が可能な場所の有無やしつらえの工夫、住宅内での家族等、同居人との関係調整、公室の共用などが問題となり、しかしその問題を抱えたまま在宅勤務・受講を実施し、継続している家庭も少なくないと思われる。一方で、2021年8月時点でコロナ禍が終わる兆しは見え、また働き方改革やオフィスのあり方再考、多様な学びの実現等の点から、在宅勤務・受講は

継続する可能性も高いことから、今からコロナ後の住宅の在り方を検討していく必要があると思われる。

そこで本研究は、オンラインによる在宅勤務や在宅受講をするために利用した住宅内の場所の課題等に関するアンケート調査の結果を基に、コロナ禍での住宅の使われ方と課題を明らかにすることを目的とする。

#### 1-2. 研究及び調査方法

日本で新型コロナウイルスの感染拡大の第2波が比較的収まった2020年10月17日から31日にGoogleフォームを用いたアンケート調査を、知人を中心にSNS等を利用して拡散するスノーボールサンプリング方法で行い、335名から回答を得た。その結果を基に、コロナ禍に在宅勤務・受講が行われた場所（第2章）、気持ちの切り替えや同居人との関係調整、部屋の広さやしつらえなどの課題（第3章）、公室の共用（第4章）について分析、考察を行う。

#### 1-3. 既往研究と本研究の位置付け

2020年のコロナ禍以前に発表された住宅で仕事を

\* 名古屋大学大学院環境学研究科 博士前期課程

Grad. Student, Graduate School of Environmental Students, Nagoya Univ.

\*\* 名古屋大学大学院環境学研究科 教授・博士（工学）

Prof., Graduate School of Environmental Students, Nagoya Univ., Dr.Eng.

行うことに関する建築計画学の研究は SOHO などのあらかじめ仕事を行うことを想定して作られた住宅に関する研究が中心である。

小笠原 1) らは計画された仕事場を伴う都市住居の仕事空間と居住空間の関係とアクセス方法の特徴を示し、中村 2) らは仕事空間と居住空間の関係とアクセス方法の違いによる利用者の満足度の違いから仕事空間の独立性の高さが重要であることを示した。白石 3) らは仕事と生活行為が兼用されることで家族間の接点が増加し、関係が強化される可能性を示した。これに対して本研究は、2020 年のコロナ禍において、オンラインによる在宅勤務や在宅受講を想定して作られていない住宅に着目し、在宅勤務や在宅受講を行った場所や、その際の問題点に関するアンケート調査結果から、住宅の使われ方と課題を明らかにする。

2. アンケートの回答者と利用場所の特徴

2-1. 回答者属性

社会人と学生は、仕事と受講というように活動内容が違うことを考慮して分類した。また社会人でも、年

表 1 アンケート内容

基本情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>年齢</li> <li>職業</li> <li>居住形態</li> <li>同居人の人数</li> <li>同居人との関係</li> <li>間取り</li> <li>自室の有無</li> </ul>	コロナ禍における住宅の使われ方	<ul style="list-style-type: none"> <li>仕事や受講に利用した場所</li> <li>仕事や受講に最も利用した場所</li> <li>行った工夫</li> <li>困ったこと</li> <li>必要だと思うこと</li> </ul>
------	---	-----------------	--

	学生		社会人	
	40 歳未満	40 歳以上	40 歳未満	40 歳以上
同居人有	自室有 (学生) n=100	自室有 (社会人) n=23	自室有 (社会人) n=17	自室有 (社会人) n=12
同居人無	自室無 (学生) n=12	自室無 (社会人) n=8	自室無 (社会人) n=12	自室無 (社会人) n=3

図 1 回答者の属性類型とその特徴 (n=298)

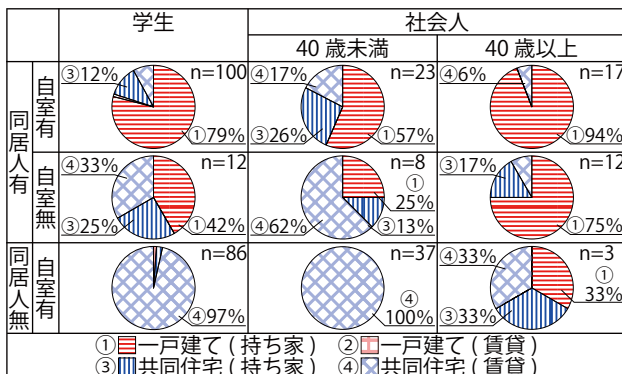


図 2 回答者属性と居住形態の関係 (n=270)

齢の違いによって同居人との関係の違いがあるため、年齢によって分類した。さらに、同居人の有無、自室の有無によって回答者を分類した (図 1)。

同居人がいない学生の 97%、40 歳未満の社会人の全ての人は、共同住宅 (賃貸) に住んでいる (図 2)。同居人がいる人の多くが公室を持っているのに対し、同居人がいない学生の 94%、40 歳未満の社会人の 86% はワンルームもしくは 1K に暮らしている (図 3)。

2-2. 在宅勤務・受講を行った場所の類型化

公室と私室で分類し、次に団樂、食事、就寝、さらに仕事の行為と個人が専有する空間であるかに注目して計 5 つに分類した (表 2)。最も利用した場所について、個人の寝室 (同居人有) が 85%、個人の寝室 (同居人無) が 94% と高くなっている (図 4)。個人の寝室 (同居人無) を最も利用した人は、利用場所の数が 1 つである割合が 79% と高く、複数人の寝室を最も利用した人の 83% が複数の場所を利用している (図 5)。

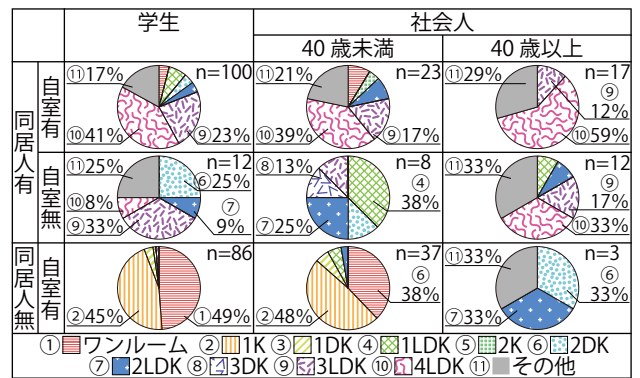


図 3 回答者属性と間取りの関係 (n=270)

表 2 利用場所の類型とその特徴

類型	私室				公室 (n=48)
	個人の寝室 (同居人有) (n=89)	個人の寝室 (同居人無) (n=99)	複数人の寝室 (n=12)	寝室以外の私室 (n=22)	
部屋	個人の子供部屋、夫婦別寝の寝室	自室	兄弟室、夫婦室	書斎、普段空いている部屋	リビング、ダイニング
特徴	就寝、個人が専有できる	食事、就寝、個人が専有できる	就寝、個人が専有できない	仕事、個人が専有できる	団樂、食事、個人が専有できない

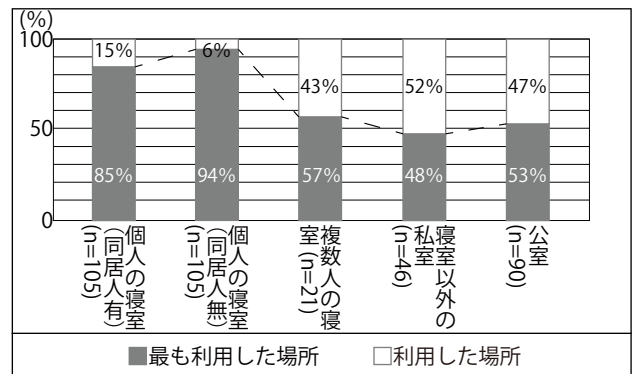


図 4 利用した場所 (複数回答: n=367)

2-3. 回答者属性と在宅勤務・受講を行った場所の関係

最も利用した場所が個人の寝室(同居人無)である割合は、同居人がいない学生が88%、同居人がいない40歳未満の社会人が79%と高く(図6)、また利用場所の数が1つである割合も同居人がいない学生が73%、同居人がいない40歳未満の社会人が79%であった(図7)。理由として、ワンルームもしくは1Kに暮らしている人が多く、他に利用できる部屋がないためと考えられる。一方、自室のない学生の83%と自室のない40歳未満の社会人の67%が複数の場所を利用している(図7)。これは、同居人の活動に合わせて一人になれる場所を選んだためと考えられる。

学生にとって複数人の寝室とは兄弟で一つの部屋を利用している場合であり、自室の無い学生の80%が兄弟と共用の私室を利用していると考えられる。一方、自室の無い社会人は全て公室を利用しており(図6)、その公室は子供にとって利用できない部屋、もしくは利用したくない部屋となっていると考えられる。

また、利用した場所が一箇所の割合は、同居がいるのであるのに対し、40歳以上の社会人で自室がある人が70%、自室がある人が50%となっている(図7)。40歳以上の社会人は世帯主である可能性が高いが、世帯主の利用場所は決まっており、それに合わせて子供が利用場所を選んでいると考えられる。

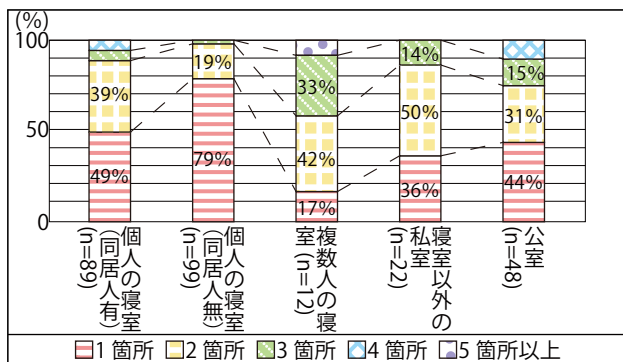


図5 利用場所とその数の関係 (n=270)

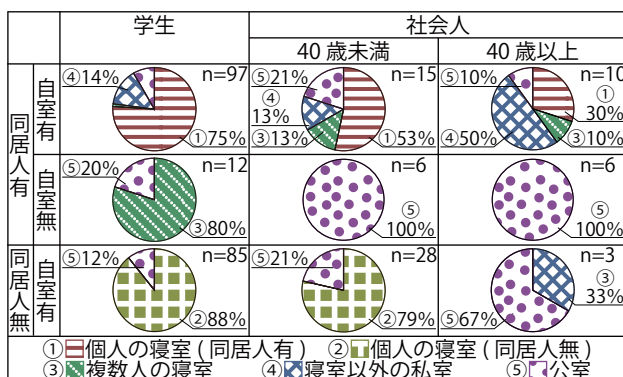


図6 回答者属性と利用場所の関係 (n=262)

3. 在宅勤務・受講における各種問題

3-1. 気持ちの切り替えに関する問題

同居人がいない学生の53%と同居人がいない40歳未満の社会人の64%は、気持ちの切り替えが難しいと答えている(図8)。自室が無い学生と40歳未満の社会人の多くは、ワンルームもしくは1Kに暮らしているため、一つの空間で食事、就寝、仕事を行わなければならないと、仕事や受講と切り離された場所を確保できないことが気持ちの切り替えの難しさに関係していると考えられる。また、最も利用した場所が公室である人の50%が難しいと答えており、食事等と仕事と同じ空間で行われることに起因していると考えられる(図9)。以上から、就寝や食事を行う場所を仕事を行う場所と分離することが必要であると考えられる。

さらに、利用場所数が多いほど、気持ちの切り替えが難しいと感じている(図10)。利用場所の数が多い

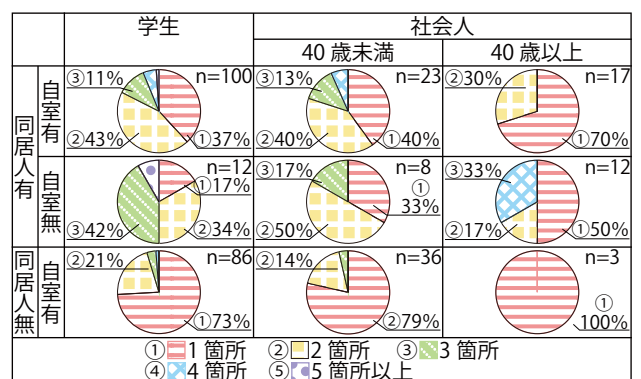


図7 回答者属性と利用場所の数の関係 (n=297)

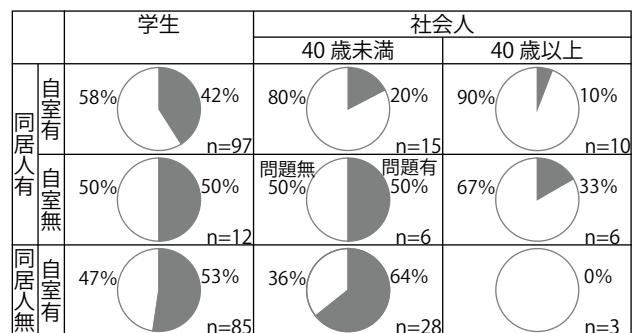


図8 回答者属性と気持ちの切り替えの難しさの有無 (n=262)

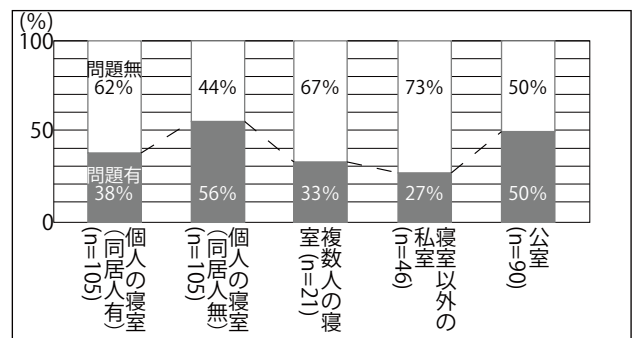


図9 利用場所と気持ちの切り替えの難しさの有無 (n=262)

ほど、住宅全体で仕事が行われるようになるため、仕事や受講から切り離され、気持ちの切り替えを行える場所がなくなるためと考えられる。

### 3-2. 同居人に関する問題

同居人の話し声や物音が気になるという問題や、オンラインで聞いている声や音が同居人に聞こえるなど、同居人が関係している問題を抱えている人の割合は、自室がある学生が54%、自室のない学生が83%となっており、差があるものの共に高い割合になっている。また、社会人には自室の有無による同居人に関する問題の割合に違いが見られない(図11)。このことから、学生にとっての自室は、同居人に関する問題を解決する点で重要であるものの、自室があっても同居人の出す声や音が気になるといった問題は、完全には解決できていない様子が伺えた。

利用場所別にみると、同居人に関する問題を抱えている人の割合は、複数人の寝室で67%、公室で67%、個人の寝室(同居人有)で53%、寝室以外の私室で52%であった。複数人の寝室と公室は、個人の寝室(同

居人有)と寝室以外の私室に比べて高い割合になっているが、その差は小さい(図12)。複数人の寝室と公室はともに個人が専有できない場所であることから、同居人に関する問題は個人が専有できる場所がないことに起因していると考えられる。しかし、前述の声や音の問題と同じく、個人が専有できる場所があっても解決されるわけでもないと思われるため、さらなる検討が必要である。

### 3-3. 部屋の様子が映り込む問題

オンラインツール利用時に自分の背景に映り込んでも問題のない部屋の様子が必要だと答えた割合は同居人がいて自室がある学生が60%、同居人がいて自室が無い学生が75%、同居人がいない学生が52%と、社会人に比べて高かった(図13)。学生はオンラインでの受講が続くと、利用時間は自ずと長時間化する。一方で、社会人は会議時以外にオンラインツールを利用することが少ない。利用場所数や同居人の有無とともに、オンラインツールの利用時間も関わっていると考えられる。

利用場所別にみると、寝室以外の私室を最も利用した人は、オンラインツールの利用時の部屋の様子に問題があると答えた割合が27%と低い(図14)。寝室以外の私室は食事や睡眠と切り離された場所であるため、私生活の様子が部屋の様子に現れにくいからであると考えられる。

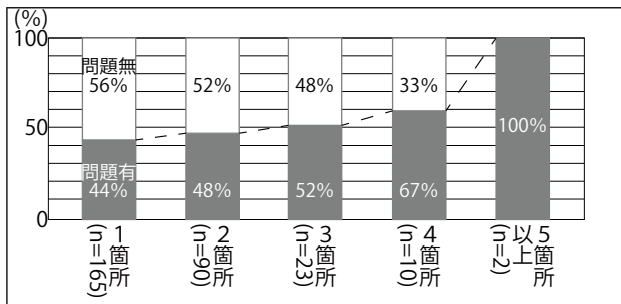


図10 利用場所の数と気持ちの切り替えの難しさの有無 (n=290)

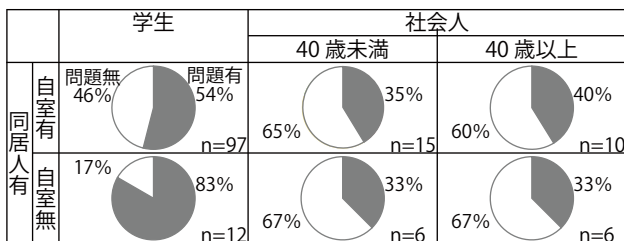


図11 回答者属性と同居人に関する問題の有無 (n=172)

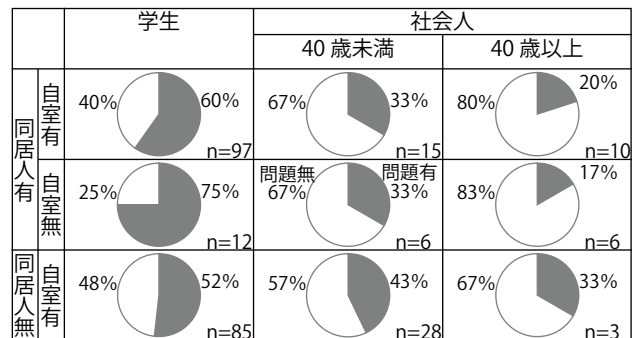


図13 回答者属性と部屋の様子に関する問題の有無 (n=262)

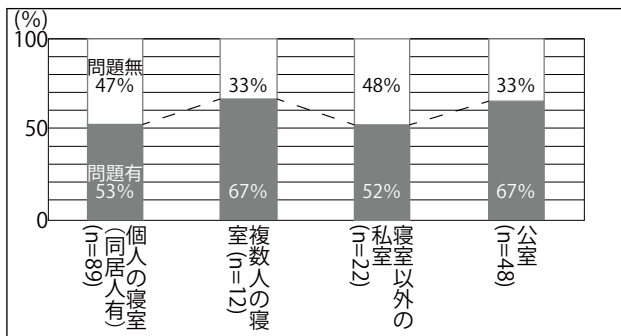


図12 利用場所と同居人に関する問題の有無 (n=151)

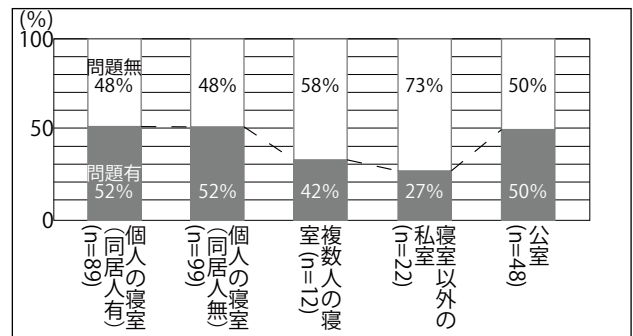


図14 利用場所と部屋の様子に関する問題の有無 (n=270)

### 3-4. 部屋の広さに関する問題

部屋の広さに問題があるとの回答は、自室が無い学生で17%、自室が無い40歳未満の社会人で33%であった(図15)。在宅勤務・受講の際の利用場所と部屋の広さに関する回答の関係を見ると、最も利用した場所が複数人の寝室である人に多くみられ、寝室以外の私室を利用した人には一人もいなかった(図16)。一人になれる場所がないことが部屋の狭さを感じることに繋がっていると考えられる。

### 3-5. 適した机や椅子がない問題に関する分析

机や椅子が無いという問題は、社会人に多くみられる(図17)。学生は、自宅学習を行う習慣があるため、この問題を抱えた人が少ないと考えられる。一方で、社会人はそれまで自宅で仕事をするという習慣が無かった人が多いためだと考えられる。

利用場所別にみると、最も利用した場所が個人の寝

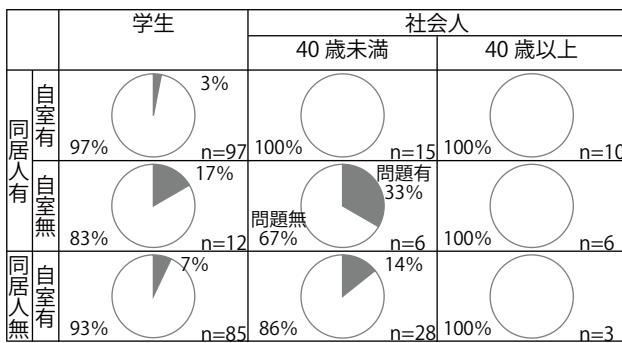


図15 回答者属性と部屋の広さに関する問題の有無 (n=262)

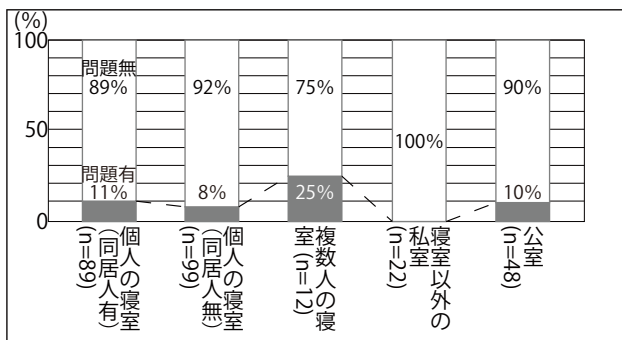


図16 利用場所と部屋の広さに関する問題の有無 (n=262)

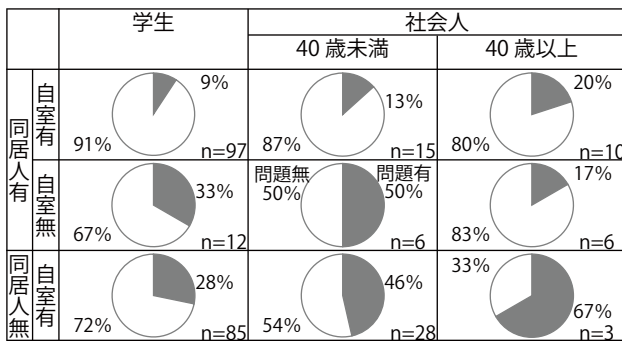


図17 回答者属性と相応しい机や椅子が無いことに起因する問題の関係 (n=262)

室である人は9%と低い(図18)。個人の寝室は主に子供部屋であることが考えられるため、勉強を行うための机や椅子があったと考えられる。

### 3-6. 在宅勤務・受講のための場所の設えの工夫

一人になれる場所や仕事や授業の受講から切り離された場所を一つの部屋として確保することは、どの家庭においても容易なことではない。よって、部屋の一面に仕事や授業の受講のためのコーナーを作る、仕事や授業の受講と食事を行う場所の分離する、カーテンや本棚を使って部屋を区分するなど、設えレベルでの工夫が必要になり、またそれが実践されていると筆者等はアンケート調査時に考えていた。

しかしアンケート結果を見ると、これらの工夫を行った人は全ての項目で20%以下だった(図19)。理由としては、工夫の仕方がわからなかった、オンラインによる在宅勤務や在宅受講がいつまで続くかわからず工夫を行うことをためらった、工夫を行うための経済的、時間的、精神的余裕がなかった、参考となる情報がなかった等が考えられる。既存住宅を改修して在宅勤務・受講に相応しい場所を確保することは容易なこと、コロナ禍の時間的経過とともに工夫の仕方

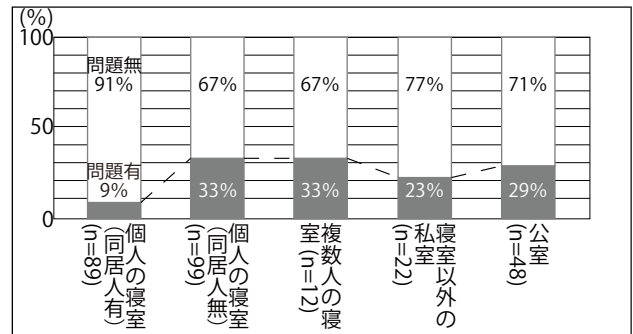


図18 利用場所と相応しい机や椅子が無いことに起因する問題の関係 (n=262)

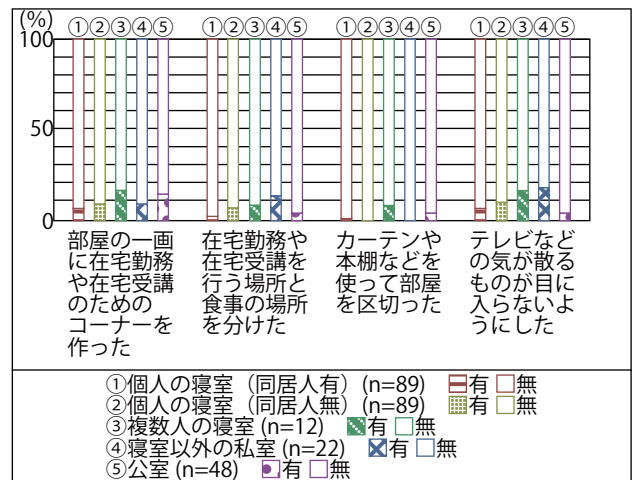


図19 利用場所と設えの工夫の関係 (n=270)

やそのための製品等が開発されていくことが考えられるため、継続的な検討が必要となろう。

#### 4. 在宅勤務・受講における公室の共用に関する分析

公室を利用した人の67%が同居人に関する問題を抱えており、公室を利用した人の多くが公室を同居人と共用することは難しいと感じていると考えられる(図12)。しかし、同居人が気分転換や家事などのために公室を利用することは十分に考えられる。そのため、公室を利用しても同居人に関する問題を感じないための工夫が必要となろう。

公室を利用した人で自室が有る人は、自室が無い人に比べて同居人に関する問題がある割合は25%と低い(図20)。自室が有る人は、自身の活動内容や同居人の活動内容に合わせて自室を利用することで、同居人に関する問題を解決していると考えられ、公室を同居人と共用するためには、自室のような一人になれる空間が必要と考えられる。

また、コロナ禍に家族と話す機会が増加したという回答もあったことから、オンラインによる在宅勤務や在宅受講は、家族間のコミュニケーションを促進させる側面もあると考えられる。同居人の様子がわかることが必要であるとする回答はほとんど見られなかったが、最も利用した場所が公室である人の8%はそのように考えている。(図21)。この結果から断定はできないが、オンラインによる在宅勤務・受講時の公室利用

は、同居人の様子を把握し、家族間のコミュニケーションを促進する側面もあると考えられる。

#### 5. 総括

- ①同居人がいない人はワンルームもしくは1Kに住んでいるため、他に利用できる部屋がなく、仕事や受講と切り離された空間が確保できず、気持ちの切り替えが難しいと感じている。
- ②利用場所の数が多いほど住宅全体で仕事や授業の受講を行うことになり、気分転換のために利用できる仕事や授業の受講から切り離された場所が無くなるため、気持ちの切り替えが難しくなっている。
- ③同居人に関する問題を抱えている人は、最も利用した場所が複数人の寝室と公室である人に多い。しかし、個人の寝室(同居人有)や寝室以外の私室との差は小さいため、個人が専有できる場所があっても全ての解決策にはならないと思われる。
- ④既存住宅において一人になれる場所や仕事や授業の受講から切り離された場所を部屋として確保することは難しいため、そのような場所を部屋の一面につくる空間的工夫も対応策の一つになるとと思われる。
- ⑤公室を利用した人で自室が有る人は、同居人に関する問題があると感じた人が少ない。公室を同居人と共用するためには自室が必要と思われる。
- ⑥本研究の結果は2020年10月に実施したアンケート調査結果に基づいており、その後に発生した数回の感染拡大の波に従って、在宅勤務・受講のための課題や、実践された方策は変わってきていることが予想される。また、コロナ禍が終わった後も、特に在宅勤務は継続される可能性があるため、物理的側面や家族間の関係だけでなく、働き方の変化に応じた会社や学校、自宅以外での仕事場の確保などについて、今後も研究していく必要がある。

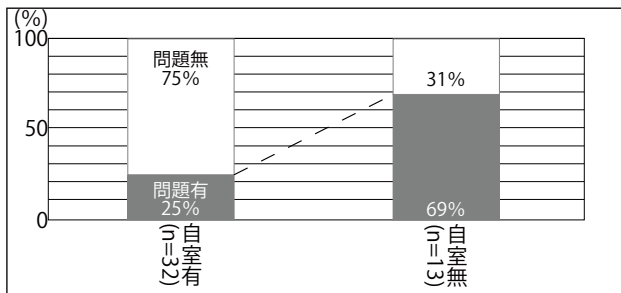


図20 公室を利用した人の同居人に関する問題と自室の有無 (n=45)

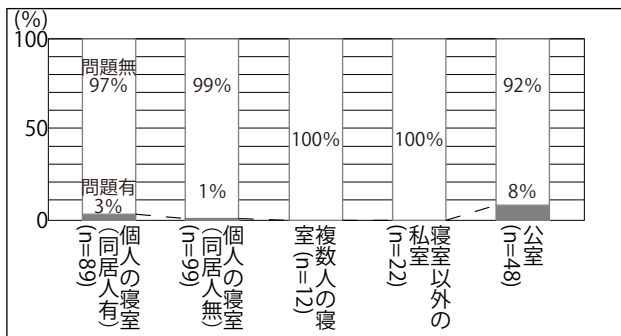


図21 利用場所と家族の様子がわかることの必要性 (n=270)

#### 参考文献

- 1) 小笠原友里、田中千賀子、重村力、山崎寿一、浅井保：仕事場を伴う都市住居の現代的展開 その1、日本建築学会大会学術講演梗概集(東海)、2003号、337-338、2003.7
- 2) 中村光将、高井宏之：SOHOのワークスタイルとオフィス形態に関する研究 - 東海圏の事例を対象として -、日本建築学会東海支部研究報告書、44号、505-508、2006.2
- 3) 白石将教、横山俊祐、白石昌之、荒木明：SOHOの住まい方に見る脱公私型居住の可能性、日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸)、E-2、491-492、2002.6